

陳舜臣さんを語る会通信

NO.7 May 2020

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2020年5月1日

沖縄へのやさしい眼差し『琉球の風』（1993年 NHK大河ドラマ）

本号で取り上げた陳舜臣著『琉球の風』の初出は、「小説現代」（講談社）1992年2月号～8月号連載です。いろんな角度から見ていきます。まずは、誕生秘話、時代背景、登場人物です。

なお、『NHK大河ドラマ・ストーリー 琉球の風』（1993 日本放送出版協会）から、数カ所、引用しますが、以下、『大河ドラマ・ストーリー』と略記いたします。（編集委員 橘 雄三）

《1. 『琉球の風』誕生秘話》

琉球大学教授高良倉吉氏は、「歴史を生きた人々への眼差し」で、次のように記しておられます。

「大河ドラマ『琉球の風』（1993年放映）の原作を陳舜臣先生が書き下ろすことになりました、との連絡がNHKから入った（中略）。このテーマを短期決戦で書けるのは実績から見て陳先生しかいないはずだ、と助言していたので、そのとおりにになったことはうれしかった」

つまり、NHK大河ドラマ『琉球の風』は、原作があつての企画ではなく、先に、沖縄の施政権返還20年を記念するNHKの企画があつての執筆だったことがわかります。

《2. 『琉球の風』に描かれた時代》

戦乱にあけくれた日本が、ようやく統一。あたらしい政権が誕生します。中国（当時明）との友好関係の中で、平和な日々を過ごしていた琉球の人々が、「琉球の暮らしを大きく変えることがおこるだろう」「薩摩が琉球を攻める。…ま、五年以内だろうな」と薩摩の琉球侵攻を噂する、そんな不穏な時代になってきます。

1606 明より冊封使（さっぽうし）が来る

1609 幕府、島津家久に命じ、琉球に出兵させる

首里、攻略。琉球王尚寧、捕われる

幕府、琉球を島津氏の所管とする

琉球は、中国交易維持のため、王国体制の存続が認められる。

沖縄を描くにあたって、時代設定をどうしてこのような苦難の時代にしたかについて、『大河ドラマ・ストーリー』「巻頭座談会」で、陳さんは次のように語っています。

「沖縄が元気だった時代をなぜ書かないのかと、いろいろな方に言われました」「沖縄が元気だった

14、15世紀は、なにか起伏がないんです」「沖縄の花というんですか、組踊とか久米島の紬とか、いろいろなものが島津の侵攻後からなんです。負けたあとにということを考えますと、沖縄の人が島津にやられたことを逆バネにして、ひとつのダイナミズムをつくった。そのつくったのは誰かという、若い人だったと思うんです。だから、今度の皆さん方の役は、私のつくった架空の人ですが、この人が将来の琉球の道を開いたということにしたいんです」

《3. 『琉球の風』の主人公はだれ？》

琉球国中山王、尚寧に仕える一方、南海王国一国家の枠を超えた交易王国を夢見る琉球の新しい時代の若者、架空の人物、啓泰が、一応、主人公ということになっています。しかし、読んでいてそうとも思えないのです。と言って、啓泰に代わる主人公らしき人物も見あたりません。『阿片戦争』『太平天国』ほか、多くの陳舜臣作品について言えることで、しいて言えば、描かれている土地・人々の生活（風土・文化）、時代が主人公なのです。

これは、陳舜臣作品の長所で、他の歴史小説家の作品にない魅力ですが、逆に、主人公、登場人物に感情移入しにくく、一体感、盛り上がり欠け、大河ドラマのような茶の間の娯楽向きという点では、弱点になるのかもしれませんが。



中国（明、清）からやってきた冊封使による即位式
「汝を封じて琉球国中山王と為す」

沖縄へのやさしい眼差し『琉球の風』（続）

《4. 沖縄へのやさしい眼差し》

NHK大河ドラマ「琉球の風」は、史上、唯一の半年作品となったのですが、その理由として、①陳舜臣著『琉球の風』は、主人公を中心とした筋の展開、盛りあがりに欠け、視聴者の心を掴みにくい。あと、②架空の世界が多すぎる。③ローカル色が強い、などと言われています。

逆に、地元の沖縄県では、第1回放送の視聴率は82%に達しました。また、本放送の5年後、1997年秋から翌年にかけて、沖縄本土復帰25年を記念して、NHK総合テレビで全編再放送されました。大河ドラマのNHK総合テレビでの再放送は異例とのことです。

また、NHK沖縄放送局は、2019年10月に発生した首里城火災を受け、これまで首里城を舞台にNHKで製作放送した番組を5夜連続再放送する企画「名作シリーズ首里城」の一環として、総集編を、2019年12月19日・20日、沖縄ローカルで再放送しています。

この作品が、それほど沖縄の人々の心を捉えたのは、沖縄に対する、陳舜臣さんの優しい眼差しがあったからです。

《5. 主人公「啓泰」の名はどこから？》

『大河ドラマ・ストーリー』「巻頭座談会」で、陳さんは次のように語っています。

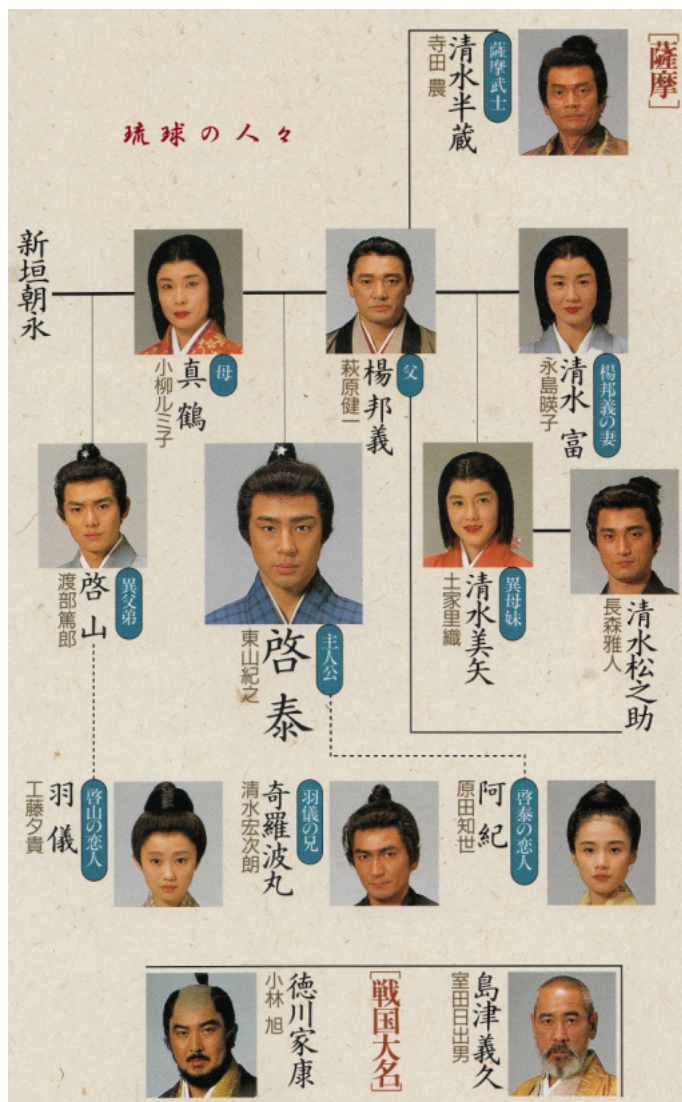
陳「泰山という山が中国にありまして、その山を啓くという感じなんです。孔子廟のある曲阜の近所に泰山という山があるんです。この山は中国の聖なる山で、天下を平和に統一した聖天子だけがそこへ行って封禅の儀式をやる資格があるんです。だから、ひとつのシンボルなんですね」「それ以外に、啓泰というのは発音しやすいでしょう」
東山「啓泰でよかったです（笑）」

《落ち穂拾い》「琉球」と「沖縄」

琉球 ■ 中国の史書『隋書』（636年）に「流求国」に関する記述があるが、「流求」が沖縄を指すのか、台湾を指すのか判別できない。沖縄を指す語として「琉球」が定着するのは、明の洪武帝の時代から。

沖縄 ■ 『唐大和上東征伝』（淡海三船 779年）の「阿児奈波島」が最初。「おきなは」と表記したのは長門本『平家物語』であるが、それによって初めて「沖縄」の文字を使ったのは新井白石の『南島志』であるといわれている。

NHK大河ドラマ「琉球の風」配役紹介



『大河ドラマ・ストーリー』より転載

■ その他の配役紹介

登場人物		俳優
尚寧王	第二尚氏 第七代国王	沢田研二
尚寧王妃	尚永王の娘	寺島しのぶ
尚永王	第六代国王	尾上菊五郎
尚永王妃	尚永王妃	富司純子
謝名親方 じゃなうなーかた	三司官(大臣)	江守徹
浦添親方	三司官(大臣)	津嘉山正種
名護親方	三司官(大臣)	橋爪功
高翔こうしょう	海商。長老	三木のり平
震天風	拳法の達人	ショー・コスギ
巴知羅はちろう	謝名親方の腹心	間寛平
謝汝烈	啓泰と夢を語る	修健

協調性こそが新時代を開く 「万国津梁（しんりょう）の鐘」はそのシンボル

第26回主要国首脳会議は、2000年7月21日から23日まで沖縄県名護市の万国津梁館で開催されました。下の2000年7月19日付朝日新聞夕刊の記事は、この開催に際して掲載された陳舜臣さんの文章です。



■15世紀に貿易立国の決意
沖縄県立博物館に蔵されている「万国津梁の鐘」は、かつては首里城正殿に掲げられてきた。一四五

琉球が明に朝貢したのは一三三二年で、明の使者が来てそれをすめたのである。琉球で産する硫黄などを貢品として持って行けば、大統曆をはじめさまざまな下賜品がもらえる。曆をもらうのは明のカレンダーに従うことで、それが服従のしるしであった。これを正朔を奉ず、という。

下賜品は貢品の数倍も値打ちがあったし、ふつうならなかなか入学できない北京の国子監（貴族子弟の学校）に、子弟を送りこめる特典もある。そのためには中国の皇帝から「王」に冊封されなければならぬ。琉球のあるじは明から「中山国王」に冊封されていたのである。

琉球はこんなわけで、進貢のたび（ふつうは二年に一度）に北京まで赴き、北京でおなじ立場の朝鮮、安南、シヤムなどの人々と交流し、早くから外交の才能に磨きをかけていた。



2000. 7. 19
朝日新聞夕刊

琉球のリアリズム



陳 舜臣
作 家

ちん・しゅんしん
1924年神戸市生まれ。小説家。貿易業のかたわら小説『青玉獅子香炉』で直木賞（68年）。歴史に題材を求めた作品多数。沖縄を舞台にしたNHK大河ドラマ「琉球の風」は原作を手がけた。

万国のかけ橋志した外交史 協調性こそが新時代を開く

進貢船の停泊する那覇港のにぎわいを描いた「進貢船の図」。近世後期の作とされる／沖縄県立図書館蔵



が清にとって代わられたあとも、冊封体制はおなじであった。一六四六年に進貢するときは、福建あたりの情勢はまだ混戦としていて、琉球の使節は明と清とにあてた二通の文書を用意し、善い面と悪い面とをたてたので清あての文書を出した。安南はこれまで通り明あての文書しかなく、困ったというのは対照的である。

①万国のかけ橋になるこの高い決意を支えていたのは徹底した琉球のリアリズムだったのだ。

琉球が両属の地であることを二百六十年もくし通せたことは、ほとんど信じられないことである。あるいは明も清もそれを知って表沙汰にすると、面倒なので見て見ぬふりをしていたのかもしれない。中国側と日本側の共同謀議の現状追認だった可能性もある。現状はいささか複雑であるが、それを打破することによって生じる混乱は、どちらにとっても歓迎できなかったのだ。

②数百年の冊封体制下、しかもその後半は両属の国として生き抜いた琉球は、たぐいまれな協調性を身につけてきた。かつて幕末の動乱期に、ペリーは日本に着く前に那覇に寄っているし、その後もなんども来た。琉球王府の役人が交渉したのだが、そのなかに薩摩藩士が琉球装に参加し学習している。進貢船にも琉球装した薩摩藩士が乗り込んで北京まで行ったのだ。これが明治維新で薩摩が大きな役割を演じた歴史の背景の一つだったかもしれない。

東アジアにE.C（欧州共同体）やEU（欧州連合）のようなものが構築されると予想して、それに「蓬莱経済圏構想」と命名している人もいる。十五世紀に琉球はすばらしい立地条件をもつ「蓬莱島」であること、「万国津梁の鐘」の銘文にうたっていることに由来するのである。十五世紀は明の鄭和の七回にわたる大航海（一四〇五年から一四三三年）が終わった。一回に六十数隻の巨船と二万数千人の兵員を要する巨額の費用をおそれた明の兵部（国防省）の幹部が航海資料を破壊して、もう二度とそんなプロジェクトができなようにした。アジア、アフリカの海上に国家権力を背にした勢力はさすがに消した。そしてポルトガルを先頭にしたヨーロッパの冒険商人が、アジアの海にすがたをあらわす前であった。これが琉球が元気であった時代である。

③世界の首脳が集まる琉球が、二十一世紀に発信しうる最大のメッセージは、ナショナリズムに代わって協調性こそが新しい時代をひらくことなのだ。十六世紀のポルトガル人トメ・ペレス以来十九世紀のバルジール・ホール、マクレオードに至るまで、その著書に琉球の人はきわめて好意的に書かれている。ゴライナイという琉球の信仰は、他界から幸せの神が来ることになっている。私たちはそれに報いなければならぬ。これが、琉球のホスピタリティの原点であろう。

琉球人の客あしらいは実利目当てのものではない。ときによれば、命をかけても客のためをはかる気概を持っている。キリシタン禁制下の十七〇四年に琉球王府では「南蛮船が漂着しても薩州に報告しないよう」に、もし薩州が来ればそれの場合には船長に口止めし、その証文をとるように、という内規をつくっている。漂着者に親切にせよということにはかならない。漂着者と親しくしたために一六三二年に石垣で、宮長頭という人が極刑になっている。それを知ったことだ。

④他界から幸せの神到来
琉球人の客あしらいは実利目当てのものではない。ときによれば、命をかけても客のためをはかる気概を持っている。キリシタン禁制下の十七〇四年に琉球王府では「南蛮船が漂着しても薩州に報告しないよう」に、もし薩州が来ればそれの場合には船長に口止めし、その証文をとるように、という内規をつくっている。漂着者に親切にせよということにはかならない。漂着者と親しくしたために一六三二年に石垣で、宮長頭という人が極刑になっている。それを知ったことだ。

陳舜臣さんのコスモポリタニズム と 「万国津梁の鐘」

《6. 南海王国－国家の枠を超えた交易王国－》

陳舜臣さんは、啓泰を琉球国中山王、尚寧に仕える一方、南海王国－国家の枠を超えた交易王国－を夢見る琉球の新しい時代の若者として描いております。『琉球の風』から引用します。

「（南海王国だ。・・・）それしかない」と啓泰はあらためておもった。巴知羅は島津勢力下の「支藩」として、雌伏のあと、徐々に交易で力をつけ、やがて独立して、南西の雄藩をつくりあげようと考えている。啓泰は明国の南部まで視座にいった、交易圏を、現存の政権のうえにかぶせ、それを南海王国に発展させることをたくらんでいる。（中略）彼が、謝汝烈とともにつくりあげようとする南海王国には、尚王家の席は予定されていないのである」

陳さんの描く南海王国、それは、「国家の枠を超えた交易王国」で、この時代、東アジアに進出してきた、イギリスやオランダの東インド会社の組織をも睨んだものだったのでしょ。

《7. 「万国津梁の鐘」》

『琉球の風』から引用します。薩摩との開戦前夜、尚寧が抗戦を決定するくだりです。

その鐘は尚泰久王の五年（一四五八年）に、王命によって鑄造され、首里城正殿にかけられた。

琉球国ハ南海ノ勝地ニシテ、三韓ノ秀ヲ鍾メ、大明ヲ以テ輔車ト為シ、日域（日本のこと）ヲ以テ唇齒ト為ス、此ノ二ノ中間ニ在リテ湧出スル所ノ蓬萊島ナリ、舟楫（舟とかい）ヲ以テ万国ノ津梁（かけ橋）ト為シ、異産至宝（異国の物産、財宝）ハ（以下略）

群臣は心のなかで黙読し、すすりあげる声がひろがった。琉球は舟をもってかけ橋とする交易の国である。海国の意気を高らかに謳いあげたもので、人びとは「万国津梁の鐘」と呼んで親しみ仰いできた。



本号前ページの新聞記事でも陳舜臣さんは、この鐘に言及しています。沖縄が元気であった時代を象徴するこの鐘に強い思い入れがおりりのようです。

（鐘は沖縄県立博物館・美術館蔵）

淮安に琉球国京都通事鄭文英の墓を訪ねる

淮安は江蘇省北西部、大運河沿いの大きな都市です。周恩来の故居があります。私（橘）は、2006年、この町に「琉球国京都通事鄭文英墓」を訪ねました。

墓の門壁の説明書き。

「鄭文英（1744－1793）別名大嶺親雲上、原籍は福建建長楽。明の洪武二十五年、その祖先は閩地の36姓人に従い、中国の文化と先進技術を携えて、琉球へ渡り、その地を開拓した。鄭文英は、その十五世である。清乾隆五十八年（1793年）一月二十三日、鄭文英は命を受け使者として来貢したが、途上、十一月十四日、病死し、王宮清口駅（今の淮陰区図書館裏庭）にて埋葬された」

門壁説明書きの「閩地の36姓人」について、『琉球の風』から引用します。

「明の太祖の洪武年間(1368-1398)に、明が閩(福建)人三十六姓を琉球に下賜したといわれている。（中略）現代ふうにいえば、先進技術のもち主を派遣したということにほかならない」

この人たちが住み着いたのが久米村のおこりです。



上…「鄭文英墓」プレート
中…門扉 この奥に下左のカップケーキのような墓
下右…私は、このおじさんの輪タク？の荷台に乗って墓に到着